

高齢者の手習いよろしく初めてパソコンのウェブ検索なるものにチャレンジしてみた。「ぶあいそう」という言葉である。国語辞典によると「ぶあいそう」は、（無愛想）愛想のないこと。そっけなくつつけんどんなこと。またそのさま。ぶあいそ。「無愛想な返事」「無愛想な奴」となっているが、検索の結果、実にたくさんの「ぶあいそう」があることに驚いた。旅館、食物屋、居酒屋、古道具屋、インテリアショップ等々。その中に知りたかった言葉「武相荘」があることに安堵した。

「武相荘」とは、東京都町田市にある白洲次郎・正子夫妻の終の棲家となった旧邸宅である。現在は「旧白洲邸・武相荘」として記念館・資料館として一般公開されている。武相荘の名の由来は、白洲夫妻が昭和 17 年に、当時の東京府南多摩郡鶴川村（現在の東京都町田市能ヶ谷）に農家を購入し、翌年引っ越してきた当時より、白洲次郎がこの住まいに武相荘と名付けていた。武相荘とは、この地が武蔵の国と相模の国の境に位置することに因んで、また彼独特の一捻りしたいという気持ちから無愛想をかけたものである。白洲夫妻がこの家を購入し、引っ越してきた経緯は、「白洲正子自伝」（新潮社刊）の中の「鶴川村へ移る」に記されている。

余談になるが、彼女は、この自伝の中で「私は、父も母も、そのまた先祖も生粋の薩摩隼人だが、東京生まれの山の手育ちで、一度も鹿児島に住んだことはないにも拘わらず東京が故郷とは思えないのである。」と、出自を明らかにしている。

「旧白洲邸・武相荘」を検索するきっかけとなった「薩摩武相荘」についてである。この武相荘は、ある女性が退職後に、独力で永年の夢を実現させた図書館の名称である。この図書館は、鹿児島市に隣接する市の郊外にある。広大な茶畑に囲まれた小さな集落の中程に位置している。農道沿いの宅地の奥にひっそり建っている彼女の生家（明治 40 年築造の無人の家屋）を、退職を機に大改造したものである。リニューアルされた家屋から百年を超える歴史を感じることは難しい。内部の煤けた大黒柱などにこの家の歴史を窺うのみである。図書館の内部は落ち着いた色調の壁一面に新しい書架を設え、自らの蔵書や友人知己から集まってきた本や雑誌などを細やかに整理してある。

彼女は、いつから図書館建設の構想を持ち始めたか不明であるが、無類の愛読者である。時を忘れ、安らぎのある雰囲気の中で、耽読できる場所がほしいとの思いを側聞したことがある。

この武相荘には案内板はない。玄関横の大きめの表札に薩摩武相荘の文字が墨書されているだけである。また何も広報・宣伝もされていない。全くの口伝であろうが、周辺の子供たちが来てくれることを喜んでおり、また地域住民のお茶飲み処にもなっている。彼女は、今後とも薩摩武相荘が地域の公民館的施設として利用されることを望んでいる。

終わりに、彼女は団塊世代の人である。先日の新聞で作家久田恵氏が団塊世代の高齢者に関する寄稿文で「これからの高齢者は、すがる、頼らず、年を重ねるたびに、強くなっていかねばならない。その覚悟こそが新しいシニア世代の自立した生き方を見出していくチャンスかもしれない」と述べているが、私は、彼女が新しいシニア世代の人として、置かれた場所で咲き、そして咲き続けてくれることで、周囲の人々も幸せにすることができるものと思っている。